

---

# 1 ペインの悪夢

悠月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

1 ペインの悪夢

### 【Nコード】

N8033C

### 【作者名】

悠月

### 【あらすじ】

闇を蝕む満月の夜にはジンが現れる。「君の願いは何ですか？」  
今宵の舞台は船の上、その問いにこたえるのは……

## 1 ペインの悪夢

しんと静まった船の中

少年は眠れずにデッキに佇んでいた

一年に一度だけ奉公先から家に帰ることが出来る日  
嬉しさのあまり寝る事などできないのだ

潮風を受けながら水面を見下ろす

恐ろしい闇色の海も

満月の光りを反射して光沢を帯びる

あまりに大きな月が落ちてきやしないかしら

そんな心配など知らぬげに月はやわりと闇を侵蝕している

肌寒さも手元の暖かいお茶のため気にならない

赤いお茶も月光を跳ね返して光る

胸元を飾る水晶のペンダントもきらりと光った

少年は何だか幸せだった

明日には両親にも妹にも会えるのだ

奉公先のおやじさんがたまにくれた小遣いも使わずに貯めた

故郷のハーナお婆さんの店で妹の大好きなお菓子を買ってやろう  
それとも可愛いリボンを買ってやろうか

でも欲を言えば

あと余分に1ペインあればいいと思う

そうすれば妹に星のように美しいキャンディーをお土産にできるのに  
港のショップで見つけたキャンディー

初めて見たとき本当に食べれるのかしらと疑問に思ったものだ

カップの中で砕けた月の光はペンダントの中を巡った

「君の願いは何ですか？」

少年は突如聞こえた声に驚き後ろを振り返った

そこには全身を黒衣で纏めたものが立っていた

少年は目を丸くする

少年が甲板に出た時には確かに他の人間が甲板にいたが  
今日の前に居るものとは明らかに違う

視線を巡らすと

もう一人の人間がいた

少年より先に甲板にいた者だ

艶かしい女だった

そちらも驚いたように黒衣のものを見つめている

「・・・あの」

「私は月夜に呼び出される魔物ですよ」

おろおろと視線をさ迷わす少年にそれはフツと笑った

「まもの・・・」

「ええ願いを叶えるためのね。」

それに呼び出されたのですと魔物は少年のペンダントを指差した

満月に導かれて現れる魔物をジンと呼んだらうか  
そんな話をずっと昔に聞いた気がする

ああ、そうだ

まだ家にいた頃に寝物語として聞いたのだ

『とても大きな満月の夜にはねジンが現れるんだよ  
彼はとっても気まぐれで

時に願い事を叶えてくれる』

「さあ、願い事はなんですか？」

願い事？

自分の願い事は・・・

ああ、そうだ

あと1ペインあったら

少年が考え込んでいたら向こうから女が近づいてきた  
少年には目もくれず、魔物を凝視している

「なんでも叶えてくれるのかい？」

女は甘やかな声で尋ねた

「願い事によりますが」

「不老不死なんかもかい？」

「場合によりますね」

魔物は質問に答えながらも女のほづをチラッと見ない  
あくまで契約者は少年なのだ

「ぼうや。願い事はなんなのさ。」

女は鼻を鳴らしながら言った

「・・・１ペイン」

少年の声は小さかったが、ここは寝静まった船の上

「１ペインですか・・・？」

「１ペイン！」

女は叫んだ

１ペインなど彼女の一回の食事代にも遠く及ばない  
彼女の形の良い爪一枚とでもっと金がかかっている

「ぼうや。私が１ペリオンあげるから、私の願い事を叶えさせてお  
くれよ。」

１ペリオンは１００ペインである

それだけあったら小さな店の菓子など全部買ってお釣りがくる

「１・・・ペリオン？」

少年には縁もない金額だった  
すごい額であることは分かるがいまいち現実味がない

「でも・・・１ペイン」

そう

少年のほしいのは１ペインなのだ  
星のキャンディーを買うための

「１ペインなら文句無いんだね」

女は少年に１ペインコインを投げつけた  
銀色の光りは少年の手に滑り落ちた

「ほら、これで私は願い事を買ったんだ。いいだろう!」

少年はこくりと頷いた。

「ありがとう」

少年は律儀にお辞儀をして礼を言ったがもはや女の目には映っていない  
なかった

女はぬらりと光る唇を笑みの形に歪めた

「さあ、私の願いを叶えておくれ」

「・・・いいでしょう」

魔物はため息をついたようだった

「あなたの願い事は何ですか。」

「見て」

女は自分に手を当てた

「象牙のような肌。金系の髪。エメラルド色の瞳。珊瑚のような唇。ねえ、美しいでしょ？」

女が言い張るとおり、女は美しかった

肌には傷一つ無く、髪は月の光すら眩むほど

深い色の瞳は誰をも惹きつける

均整の取れたからだのラインは名工による彫刻のようだ

「努力の賜物よ。」

「これが失われるなんて御免だわ。私ずっと美しいままでいたいの。」

「

女は魔物を真正面からとらえる

「さあ、叶えて頂戴」

「ずっと美しいままで・・・？」

「そうよ」

象牙の肌、金系の髪、エメラルドの瞳、珊瑚の唇、真珠の歯、桜貝の爪・・・



「ええ、良いですよ」

魔物は嗤った

どんな絵画の魔物よりも禍々しく  
どんな名工の彫刻よりも美しく

「美しいままでね」

潮風が魔物の衣を翻す

深海よりなお深い闇が眼前を埋め尽くす

もつと美しくなりたい？

それは暗く甘美に浸透する闇の言葉

「もちろん」

無知な人間は耳を塞ぐ事を知らない

いいでしょう

象牙の肌、金糸の髪、エメラルドの瞳、  
珊瑚の唇、真珠の歯、桜  
貝の爪・・・

いつの間にか魔物も言葉も消えてしまった  
月光に照らされるのは女だけ

「ああ」

そこにあつたのは言葉通りの体だった

「もう誰にも負けないわ」

女は笑った

そう、ずっと・・・

「そうよ。永遠に！」

永遠にね・・・

その時

波がうねった

夜の扉が開き

闇色の触手が女を捕らえる

氷のように冷たいソレは女をなお冷たい海底に攫っていく

「

」

音にならない叫びが泡となって溶けていく

象牙の肌、金糸の髪、エメラルドの瞳、珊瑚の唇、真珠の歯、桜  
貝の爪・・・

貴石で造られた体が浮かび上がることはない

よかったですしょう？

これであなたに傷を付けるものはいませんよ

永遠にね

まあその美しさを賞賛するものもいませんがね

「願い事は何かと聞かれたら  
一つしか言っではいけないよ

一つ目の代償は1ペイン

もう一つ目の代償は魔物の口付けだから

二つ目を聞かれても

耳を塞がなくてはいけないよ

うっかり聞いてしまえば

気がついたときには海の底なのだから

（後書き）

読んでいただいております。この作品『彼方より響く唄』と同シリーズになっています。よろしかったらそっちも読んでみてください。ご意見、ご感想をいただけると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8033c/>

---

1 ペインの悪夢

2010年10月17日04時36分発行